〈研究ノート〉

講義の聞き取りに関する分析と問題点

三　國　純　子*

An Analysis of Listening Comprehension Problems at the College Level

Junko Mikuni

要　　旨　大学で専門分野の勉強をする留学生にとって，講義を聴き，正しく理解することは必要不可欠なことである。しかし，日本語能力が不十分なため，講義がよく理解できないという留学生が多い。講義を聴く際，留学生が難しいと感じるところはどこだろうか。それを調べるため，必修科目である『美術概論』の講義を録音し，使用されている文型や表現，語彙のどの部分が留学生にとってわかりにくいのかを尋ねた。その結果，ポーズによる語句の説明の部分が聞き取りにくいことと，板書が講義の流れを理解するのに有効なこと，専門の分野での基本的な語彙が理解の妨げになっていることがわかった。

1. は　じ　め　に

現在，文化女子大学では約400名の留学生を受け入れている。彼らの多くは日本にある日本語学校で日本語を学習しているが，母国での日本語の学習環境が整ってきたことにより，なるべく短期間で日本語の学習を終え，専門分野の勉強を望む留学生も増えている。留学生の日本語のレベルは様々だが，大学で専門的な知識を身に付けようとする留学生にとって，それぞれの専門分野で新しい情報を得られるだけの日本語の力を養うことが，大学における日本語学習の目標であろう。しかし，実際には，限られた学習時間の中で，講義を理解し，自分にとって必要な情報を取捨選択し，さらにそれを何らかの形で伝達できるだけの日本語の力を獲得するのは難しい。それは，日本語学校で学習していた日本語と，実際に大学で必要となる日本語力に大きな開きがあるからだ。語彙に関して言えば，それまで学習していた基本的な日常語彙だけではなく，書き言葉や専門用語が多く使われるようになる。聴く力に関していえば，90分の講義を１日に２～４回聴かなくてはならないわけだから，当然聴く量も多く，一文の長さも長くなり，話されるスピードも早くなる。専門書を読む場合には，繰り返し読んだり，辞書を引くことができるが，講義の場合はそうはいかない。講義の話し手が一方的に次々と話してくる音声を，瞬時に認識し，意味化し，論理を構築していかなければならない。留学生が日々経験することの中で最も多くの時間をかけ，持てる日本語力を駆使しているのは講義を聴いている時ではないだろうか。

最近は，日本語教育と専門分野との研究協力が進み，専門分野を学ぶための日本語の教材や，講

* 本学専任講師　日本語教育

義を聴く力を養うための教材も多く出版されるようになった。文化女子大学でも，専門分野の教師と協力して作成した『専門用語テキスト（服装学科)』が留学生に配布され，1年生を対象に，専門分野の教師によって解説が行われている。しかし，留学生のアンケートを見るとやはり，講義がよくわからないという者が多い。当然講義によっても難しさの度合いは違い，実習のように実物を見ながら指示を聞くことができるものは，講義中心のものより理解しやすいという。本稿では，留学生が漠然と難しいと感じている講義を，文字化し，講義の特性を分析すると共に，留学生にとって何が理解の妨げとなるのかを考察していきたい。

2. 対象とした講義と調査方法

対象とした講義は生活造形学科2年次必修の『美術概論』である。96年度，筆者の担当していた日本語の授業がたまたま2年生ばかりで，生活造形学科の学生が多かったためである。講義中心の授業で，留学生から難しいという声が多かったもののひとつでもある。筆者自身，留学生が受けている講義に出ることは日本語の授業を考えていく上でプラスになると考え，小池寿子先生にお願いして聴講させていただき，講義を録音させていただいた。

講義は毎回，前半は時代背景，美術史上の意義などの説明，後半はスライドを見ながら絵の特徴を詳細に解説するという形で進められた。講義の流れをあらかじめ提示してから，話が進むため，講義の組み立てが分かりやすかった。（資料1）また，スライドを見ながらの説明は，絵画の知識がなくとも，絵をどのように見るかが理解でき，日本人である筆者からすると非常にわかりやすい授業であった。

授業後，韓国の留学生1名，台湾の留学生3名に協力してもらい，どんな点が難しかったかを尋ねた。韓国の学生は国で世界史を勉強しており，「予備知識があるからだいたいわかるが，語彙が難しい」ということだった。台湾の留学生は「予備知識がない上，語彙が難しくて，何を言っているかよくわからない」ということだった。そこで，どんな言葉が聞き取りの際に問題になっているかを知るため，講義の録音テープをもう一度聞きながら，わからない語句や表現を挙げてもらった。（資料2）学生の空き時間を利用して1回の講義につき2名ずつ行った。講義の後半はスライドを見ながらの説明で，学生もその部分はほぼ理解できると言っていたので，講義の前半部分を中心に3回の講義を聞き，わからない語彙が出てくる度に，その言葉の説明をしながら聞き取り調査を進めていった。テープを区切りのいい所まで聞かせ，学生にわからなかった語句や表現を挙げてもらった。学生が音声をはっきり聞き取れなかったものも含まれている。学生がわからないと言った言葉は2名ともほぼ同じであった。まず，講義の特徴を分析した後，学生がわからないと言った言葉の傾向について述べたい。

3. 講義の中でよく使われていた表現

講義でよく使用される表現の先行研究についてはいくつかある。小林[1)](1989）は，聞き取りの負担を軽くするため，日本人が講義，講演のどの部分を聞き流しているかといった観点から講義でよく使われる表現を取り上げ，教材化している。羽田[2)](1990）は，理工系の学生にとって理解が

必要な実験講義での表現を，講義の流れを理解するための表現，そして要約，例示といった表現意図ごとの定型表現の二種類に分けて抽出している。

講義というのは日常会話と違い，聞き手が話の流れをコントロールすることができない。そのため，聞き手は様々な語彙・文法知識，背景知識を総動員し，次に話されることを予測しながら聞いている。また，講義の特性上，繰り返し聞くことができないので，話し手も，聞き手が理解しやすいよう意識的に様々な工夫をしている。例えば，講義の流れを示す表現を使う，前置きをして既習の事柄を思い出させたりする，重要な語句は板書したり繰り返したり言い換えたりして説明する等である。時には学生に直接，疑問を投げかけたり，語りかける。このような話し手の工夫を聞き手はうまく受け取りながら，講義を聞いているわけである。ここでは，聞き手の理解を助けるという観点から講義で使用されている表現を分類してみた。

(1) 話の流れを示す表現　　〰〰は分類に該当する表現部分

1. 先週の授業との関わりを述べ，本時のテーマを述べる。

「前回少しビデオの後でお話を始めたわけですが，東方のビザンチンの美術に対して，今度は西ヨーロッパの美術のお話を始めます。」

「今回は前回に引き続いて初期ルネッサンス，それから，盛期ルネッサンスのお話をしたいと思います。」

2. テーマに沿って説明する

「簡略に，あの，～について説明しておきますと…」

「それで特にその～についてですね，少し詳しくスライドを見ながら見ていこうと思います。」

「それで，～の内容なんですが，…」

「それで，～との違いっていうのを，ま，簡単に説明しておきますと，…」

3. 問題提起をして説明する

「で，全体にどうやって解釈したらようのかというのもあるんですが，今までずっとこういうふうに画面を見て話していて，一体この人はなんで空をかき回しているのかという問題なんですね。」

「で，昔の人達はどうしてこんな絵をかいたのかというと，これ，一種の謎解きとして…」

「つまり，どういうことかというとですね，…」

4. 横道にそれる前

「本当はこの話しをしだすと2，3時間必要になっちゃう，非常に複雑なテーマなんです。で，いろいろな美術史の上でいろいろな説が出ていますが，ここではかいつまんでね，だいたいのお話だけしておきます。」

「ま，そこの辺は世界史の授業じゃないので，あまり詳しい話をしてもわかりにくいと思うんですが，…」

「細かいことを言い出すと本当にきりがないんですけれども，…」

「～という長い長いお話があるんですが，とりあえず簡単に聞いてくだされば いいですけど，」

「このメロビングというのは～王朝なんですが，もし音楽が好きな人がいるならば，えー，ワグナーという作曲家がですね，作ったオペラ…中に含まれています。」

「一応あの，このメルクリウスはですね，…」

5. 横道にそれた後

「ま，それはともかくとして…」

「そういう細かいことはともかくとして…」

(2) 前置き―関連性を持たせながら説明するため，以前に言ったことを思い起こさせる表現

「先程いいましたように」「さっき言いましたように」

「先程言いました（名詞）」

「さっきも黒板に書きましたように」

「この前も触れましたように」

「福音書って部分，これはいつかお話ししたように」

「ここに空を飛んでいる男の子がギリシャ時代のお話をした時触れましたキューピット」

「三美神というのが踊りを始める，で前回説明しなかったかな？」

「もう忘れちゃったかもしれないけど，古代ローマの彫刻をお見せした…。」

「名前は聞いたことがあるかな？」

「古代ローマギリシャの神話がルネッサンスでもう一回取り上げられるってのは再三お話しているわけですが，」

(3) 直接語りかけ，聞き手の注意を喚起する表現

1. 「てください」「ていただきたい」などの表現を使う

「洋服着ているでしょ，これちょっと覚えといてね。」

「ビーナスってのは裸とそれから洋服を着ているっていう二つの方法で描かれるというのをちょっと覚えといてください。」

「スライドを見ながら，私が典礼書だとか聖務日課書だっていうふうに言いますから，それはこういった，先程ちょっと説明したような内容を指すんだというふうに考えてください。」

「もう一回繰り返しますね。」

「今，簡単にお話しただけで，少しはわかっていただけたとは思うんですが，…。」

「どうしてそれ程貴重なのかってことが，わかっていただけるのではないかと思うんです。」

「～というふうに記憶しておいていただければよいのではないかと…。」

2. 「皆さん」という言葉を使う

「あの，年表の方には書いてないんですが，いつか皆さんに紹介した中には少し細かく時代区分が書かれていますけれども，…。」

「皆さんもやったことがあるからわかると思うんですけれども，（鏡文字の説明）。」

「皆さんの中で疑問が起こるのが，なんでその，わざわざ手で書くかということなんですね。」

3. 同意を求める

「恋をした経験のある人ならなんとなくわかるでしょ。」

「不思議な絵でしょ。」

4. 質問する

「ブルゴーニュワインって聞いたことがあるかな？」

「写本一冊ってどれぐらいの値段すると思う？」

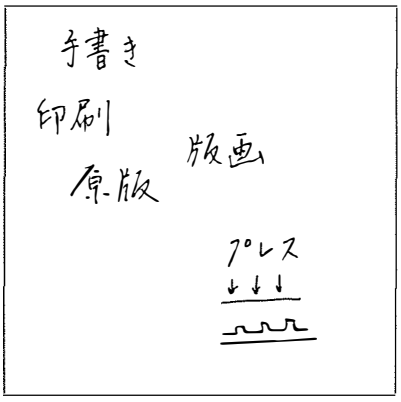
「図画の時間とかで木版画とかを彫らされたことある？」

このように講義では様々な言い回しが使われている。文科系の講義は話に奥行きや広がりを持たせるためにしばしば横道にそれることがあるが，その際も聞き手が話の流れを理解しやすいように配慮した表現が使われていた。また，講義の流れを述べる表現だけでなく，これから話すことの前置きをすることによって以前習った事柄を思い出させる表現，直接的な語りかけなどが多く用いられている。以上のような表現について，学生はかなり理解できていた。もちろん「かいつまんで」「ともかくとして」といった知らない言葉はあったが，調査したのが2年生だったこともあり，これから何について話すか，だれに対して話しているかなどはほぼ理解できていた。しかし，学生達がそれらの表現を最初から知っていたわけではない。1年間かかって少しずつ習得してきたのである。学生はこれらの表現を1年生の時点で知っていたら，講義の聞き取りの助けになったと思うと答えていた。もちろん，すべての講義に同じことが当てはまるとは言えないが，このような定型的な表現を教えておくと，その部分を聞き流し，大切な部分に集中して聞くことができる。また，正確に聞き取れなければ，大切かどうかを判断するのは難しいが，見極める際の助けになるだろう。また，講義の流れを把握することによって，次に続く内容を多少なりとも予測できるので，聞き取りの負担が幾らか軽減されるのではないだろうか。

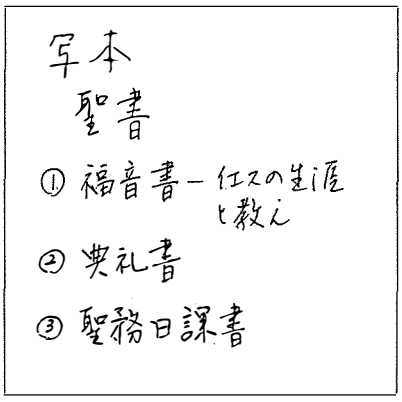
4. 板書の効用

前述のような表現以外に，話の流れを示すという点で板書の果たしている役割は非常に大きいと感じた。講演と違って，講義ではよく板書が利用される。『美術概論』の授業では本時のテーマを述べた後必ず板書をしていた。板書の内容は美術の専門用語，歴史上の出来事，人名，地名が主なものである。地名は必ず地図と共に書かれた。台湾の留学生は「ていじゅう」と最初聞いた時は，わからなかったが，板書「定住」を見ることによって理解できた。「とうげい」と聞きまちがえたために意味がよくわからなかったものも，板書に「工芸」とあったので，聞きまちがいに気付いたことがあったという。また，新しい話題に移る時は必ずといっていいほど板書されていたので，話のトピックが追いやすいという利点もあった。ここで，実際に行われた板書の具体例を講義内容とともに二つ挙げてみよう。

〈板書例１〉



〈板書例２〉



〈板書例１の講義内容〉

先程，まず皆さんのなかで疑問が起こるのが，なんでその，わざわざ手で書くかとう非常に単純な答えはそうだと思うんですね。今私たちが使っている本というのは，先程言いましたように(「手書き」と板書する）印刷という技術を使っているわけですよ。それでこの印刷ってのが先程から手書きていうのとの違い，(「印刷」と板書する)，ていうのをま，簡単に説明しておきますと，印刷っていうのは基本的に一つの字を原板，(「原板」と板書し，図を書く)こうして版を作るんですね，小学校の時とかに，図画の時間とかで木版画とかを彫られたことある？　ね。基本，いちばん簡単な形が版画なんですよ。印刷に関していうと。で，版画彫ったことがある人は，ま，わかると思いますけど，木を削ってですね，ま，表面にこういうでこぼこを作るわけですね。(図を書く)

〈板書例２の講義内容〉

それで，写本の内容なんですが，基本的には聖書の内容を写していくといった形を取っています。それでね，聖書の中でも特にスライドが出てきた時に，参考にしていただければいいんですけれども，聖書の中でも，特に福音書っていう部分，(「福音書」と板書する）これは，いつかお話しした，いつかお話ししたようにイエスの（「イエスの生涯と教え」と板書する）イエスの生涯と教え，生涯と教え，教えを書いた部分ですね，で，聖書の中での福音書ってのが，写本の中の内容としては数が多い，で，それからあのう２番目としてはですね（「典礼書」と板書する）２番目としては，典礼書というのがあるんです。で，これはあのうキリスト教の場合には……要するに教科書，テキストがある，それを典礼書って言います。

講演会のように視覚的な情報のない場合は，記憶している話の要素を頭の中で再構築しながら聞かなければならないが，講義の場合は板書を手掛かりに，話の内容と照らし合わせ，視覚と聴覚を使って話を再構築しながら聞くことができる。日本語では主語が省略されることが多いが，少なくともトピックが何であるかは，板書を見れば一目瞭然である。また，板書されている言葉や事柄については，話し手が具体例や現在との関わりなど細かく説明してくれるので，それが専門用語や知らない言葉であっても理解を深めることができる。学生は自分のノートの「典礼書」の横に，教師

の説明を聞き取り「テキスト」とメモしてあった。このように見てくると，専門用語が必ずしも理解の妨げになっているわけではないことがわかる。では，留学生にとってどんな言葉が理解しにくいのだろうか。

5. 学生が難しいと感じた言葉とその理由

『美術概論』の授業を聞いて，学生がわからないといった言葉の傾向について述べたい。聞き取り調査は前述の通り，テープを区切りのいい所まで聞かせ，学生にわからなかった語句や表現を挙げてもらう形で進めた。話し手は講義をする時，聞き手がわかりやすいように重要な言葉，書き言葉や耳慣れない言葉など理解の難しそうな言葉は，言い換えて説明している。言い換えて説明しているような言葉は，比較的ゆっくりポーズを取ってはっきりと話される傾向にあるため，耳に残りやすいようだ。そういう意味で学生が未知の語句だ，わからない，難しいと感じたものは，音声の面では聞き取りが比較的容易だと思われる。しかし，言い換えたもので理解ができたのは，説明の言葉がごく基本的なものに限られる。実例を挙げると以下のようになる。

＊下線部は学生がわからないと言った言葉である。

「海抜下，すなわち海よりも低い」
「着飾っている，ってのは要するに身を飾る自分を美しく見せようとするということで」
「人間のいろいろな本性というか，本質的な性格を分析したんですが…。」

上記の例は，言い換えの説明を聞いて，学生が理解できたものである。「要するに」「つまり」「というか」など言い換えだとわかる言葉が使われているものは，素早く言い換えだと判断し，知らない語句に捕らわれることなく，聞き進めている。しかし，実際には少しポーズを入れるだけで言い換えることが多く，教師が言い換えて説明しても学生はわからなかった。この原因としてはいくつか考えられる。まずは，頭で話を再構築していく中で，言い換えによる説明だと気付かず再構築できない場合である。わからない言葉にぶつかって，その言葉が壁になり，後に続く話についていけなくなったことも考えられる。また，説明の中にもわからない語句が出てきて，わからない言葉が増えてしまったと言うこともあるだろう。いずれにしても，ポーズによる言い換えが多いこと，そして，ポーズによる言い換え方のパターンを知ることによって，未知の語句が続いて出てきた時の対処に役立つのではないだろうか。そこで，ポーズによる言い換えの方法を分類することにした。

〈ポーズによる言い換えの方法〉

1. 同じ漢字の訓読み，音読みの他の熟語などを使う
   「それでだんだんその本が磨滅してしまう，磨り減ってしまうと，～」
   「衣ですね，衣服を作ったり」
2. 言葉を分解する
   「香炉，あのお香をたく炉ですけれども」

「馬具，馬の道具を作っていた会社」

3. 他の言葉で意味を説明する

「巨匠，最も重要な画家の一人です。」

「プラトニックラブって聞いたことがあると思いますが，全然肉体的物質的欲求抜きにした恋のあり方です。」

「携帯用のですね，要するに…という形ではなくて，持ち運びの可能な携帯用の美術」

4. 類義語に置き換える

「ブルゴーニュ公国の範図，ま，領域を指さします。」

「なるべくディテール，細部を細部をですね」

「非常に線がきれい，繊細な線で絵をかく画家」

「(ヘルメスの説明) 速くかける，速く走る，飛ぶことができるんですね。」

「一種の理想郷，アルカディア，ユートピアを描いた」

5. 具体的に何をするかを挙げる

「一種の謎解きとして，部屋にかけとくでしょ。皆で集まって，これはどういう意味だ，どういう意味だって議論するためにかけとくんです。」

上記のような例をもとに，学生にインタビューしてみると，「巨匠」の説明などはわかるはずだが，それが言い換えであると気付かなかったという。「速くかける」も予想できそうなものだが，これは「書く」の可能形と誤った判断をした結果，文のつじつまが合わなくなり，「かける」がどういう意味かわからなくなったという。留学生がわからないと言った言葉の中に，このような言い換えによる説明の言葉が少なくない。従って，今まで述べたような言い換えの方法があることを示し，「磨滅—磨り減る」「滅亡—滅ぶ」といった音訓の対応，「衣服，衣類，衣料，衣」などの類義語などに焦点を当てて，漢字の指導をしていくことが必要ではないだろうか。

6. その他のわからなかった言葉について

外国人が日本語を学習する際の指針として，『日本語能力試験の出題基準』がある。その中で1級の語彙7,800語，2級の語彙4,800語が認定されている。学生のわからなかった言葉が，日本語学習者にとって基本的なものかどうかを調べるために，和語，漢語それぞれ〈表1〉のように分類してみた。ただし，「5. 言い換えによる説明」の部分で説明されている言葉は除いてある。外来語については，単独で使われていた外来語で，学生がわからなかったものは「アングロサクソン」「パピルス」「タイムトリップ」だけだったので，この表には外来語を入れなかった。書かれたものと違って，音声だけからではどの部分が外来語か判断できないため，使用頻度の高いものは当然教えておいたほうがいいだろう。

動詞は講義の中で使われていた活用形のままを表にしたが，講義の中では受け身形が使用されることが多いので，受身形に習熟しておくことも必要だ。

1，2級の語彙に該当しているものは，日本語学習の上で基本的な語彙と言える。それを習得す

表1　留学生が意味がわからなかった言葉

	和　　語		漢　　語	
1級	滅ぶ	かすむ	復興させる	忠実
	めくる	導かれる	分裂する	田園
	剝ぐ	満たされる	復活した	
	つかさどる	栄える	便宜上	
	かける	築く	世紀末的（「世紀」のみ1級）	
	狩り	趣	主題	
2級	失う	炎	展開する	運河
	補う	臘（「臘燭」のみ2級」	原産	地上（「地」のみ2級）
	たまる	触れる	支配する	水蒸気
	茂る		祖先	
	はしご		共同体（「共同」のみ2級）	
該当なし	鞣(なめ)す	すかす	主流	敬遠する
	象(かたど)る	透ける	構図	受難
	射られる	まとう	調教	埋葬する
	もやがかかる	奏でる	開花した	特異
	うずもれる（「うずめる」は1級）		拠点	衰退する
	仲たがいをする（「仲直り」は2級）		土砂	凸面鏡

ることはいうまでもないが，それ以外の語句をどうやって習得していくかが問題になってくる。これらの語句は，日常語とも言えないし，専門用語とも言い切れない。話し手も，これらの語句に関して特別な説明はしていない。つまり，これらの語句は当然知っている語句とみなされているため，強調されたり繰り返されたりすることがなく，あまり目だたないのである。目立たない語句は，当然聞き逃すことも多くなるが，目立たなくても理解を深める上で重要な語句も多い。この中のいくつかは講義の中で何回か使われており，美術史という学問分野では重要な言葉と言えるものもある。小宮[3](1995）は専門教育の前提となる基本的な専門語の重要性を述べている。日本人なら誰でも知っているが，留学生は知らないといった基本的な専門語を指導していく必要がある。上記の中で美術に関連する言葉は「象る」「透ける」「まとう」「主流」「構図」「開花する」「拠点」「衰退する」「受難」「埋葬」「特異」などである。「受難」「埋葬」などは美術と直接関係ないと思われるかもしれないが，西洋美術史はキリスト教と密接に結び付いており，キリストの受難を描いたものも多く，そうしたキリスト教の背景知識とそこで使われる語句は知っておく必要がある。

1）和語について

山本[4](1995）によると，初出の耳慣れない漢語で情報価の高い漢語は一般に冒頭に発話され，顕著なプロミネンスがつくので聞き取りやすい。一方，和語は速度も速く，弱く発音される傾向があるため，基本的な和語の方が講義を聞き取る際の有力な言語知識となっているのではないかという指摘がある。確かに専門用語や漢語は板書されたり，言い換えて説明されることが多いが，和語は「鞣(なめ)す」のような特別なもの以外はほとんど説明されなかった。しかし，〈表1〉を見ると，『美術概論』の講義の場合は漢語が多用されており，漢語も和語と同様に学生にとって聞き取りが難し

く，理解の妨げになっていると思われる。

また，和語の動詞は単独で使われるだけでなく，複合動詞となって用いられることが多い。しかし，学生の多くはそれを全く他の言葉だと思い込んでしまうようだ。表1には入れなかったが，学生がわからなかった複合動詞は「住み着く，持ち運び，築き上げる，打ち立てる，磨り減る，着飾る，入り組む，酔いしれる」などである。「住む」「着く」「持つ」「運ぶ」「減る」などどれも日本語学習の初級段階で学習済みの言葉である。もちろん複合動詞も，言葉によって，動作の方向性を示したり，動作の始動を示したり，強意をそえたりと厳密にいえば，意味の変化は複雑だ。しかし，「磨り減る」がわからなくても「減る」を知っていればそこから多少なりとも意味が予測できるのではないだろうか。講義における聴解力をつけるためには，複合動詞の知識を増やし，複合動詞を正しく聞き取り，理解することが必要だ。

2）漢語について

漢語は同音異義語が多いという特徴があるため，間違って解釈されてしまうことがある。本来なら，文脈から違いを判断しなければならないのだが，講義のように瞬時に判断しなければならないものは自分が知っている語句を探して理解していくことになる。学生が「とくい」はわかるというのでどう書くか聞いてみたら「特異な画家」というのを「得意な画家」だと思っていた。書かれたものをゆっくり読む場合は，どこか変だと気付くだろうが，講義の中ではそれができない。このような同音異義語が多い語句は，アクセントなども特に留意して教える必要がある。そして，漢語を教える際には，それを音で聞いてすぐ意味と直結できるようになるまで何回も繰り返し聞く練習が必要だ。上記の漢語の多くは，文字を見ると，学生はすぐ意味がわかり，講義の内容を改めて理解したようだった。漢字圏の学習者は漢字という視覚情報に頼る傾向があるため，耳から学習する機会を増やす工夫が必要である。

7. まとめと今後の課題

講義では聞き手の理解を促すために，様々な表現が使われ工夫されていた。話し手によって細かい表現の違いはあるだろうが，このような表現を留学生に教えることで，講義の流れや話し手の意図を意識した聞き取りができるようになるのではないだろうか。

また，講義の中で，話し手は重要な事柄や，聞き手がわかりにくいだろうと思われる事柄は，必ず何らかの前置きをして提示していた。そうすることによって，既習の事柄を思い起こさせたり，与えた多くの情報に関連性を持たせようとしたりしていた。重松[5]（1987）は留学生の講義の聴解における問題点として，話の挿入部とそうでない部分の区別が難しいことを挙げている。前置きは話の挿入部にも，使用されることが多かった。前置きの部分を正しく聞き取ることは，講義の理解を深める上で役立つのではないかと思われる。今後この前置きの部分が，講義の流れの中で果たしている役割を分析していきたい。

今回調査した『美術概論』の講義で，留学生が難しいと感じたのは文型，表現ではなく語彙だった。これは，限られた時間の中で，西洋の美術の歴史を概観するという目的のもと，聞き手が知らない情報を大量に与え続けなければならないというこの講義の特性も関係していると思われる。講

義の中で留学生にとって未知の言葉が多く出てきたが，専門用語が必ずしも理解の妨げになっているわけではないこともわかった。未知の語句が続いて出てきた時は，言い換えである可能性が高いことを考慮し，そのうちの一つをまず推測することが大切だ。重要な事柄は，話し手もゆっくり，はっきり話し，繰り返すことが多いので，言い換えの方法を知っておくと，推測しやすくなるだろう。

日本語の初級，中級の学習段階では，文法，文型の習得を中心に進めることが多い。しかし，専門分野の教育を受ける段階では，基本的な専門分野の語彙の習得，その分野で必要となる背景知識に対する理解も重要になってくる。今回の調査をもとに，専門用語というほどではないが，美術の歴史を概観していく上で知っておくべき言葉を抽出し，留学生に対する日本語の指導の中で生かしていきたい。

注

1) フォード順子・小林典子（1989）「聴解授業『講義・講演を聴く』を行って―聞き取りの負担を軽くするために―」『日本語教育論集第5号』筑波大学留学生センター
2) 羽田野洋子（1990）「中・上級の聴解教材」日本語教育学会予稿集
3) 小宮千鶴子（1995）「専門日本語教育の専門語―経済の基本的な専門語の特定をめざして」『日本語教育』86号
4) 山本富美子（1995）「講義，対談等の聴解のメカニズム―テクスト分析を通して―」『日本語教育』86号
5) 重松　淳（1987）「大学講義のスタイル分析」『日本語と日本語教育』16号

参 考 文 献

1) 横田淳子（1990）「専門教育とのつながりを重視する上級日本語教育の方法」『日本語教育』71号
2) 重松　淳・長谷川恒夫（1988）「講義の聴解指導」『日本語教育』64号
3) 新屋映子（1993）「日本語中上級学習者の聴解の能力について」『日本語教育』79号
4) 山本富美子（1994）「上級聴解力を支える下位知識の分析―その階層化構造について―」『日本語教育』82号
5) 仁科喜久子（1997）「日本語教育における専門用語の扱い」『日本語学』2
6) 国際交流基金編（1994）『日本語能力試験　出題基準』凡人社
7) 永井鉄朗（1996）「日本語複合動詞の教育について」『日本語教育』88号
8) 柳　義和（1995）「Listening 教材の背景と構造」『名古屋学院大学外国語教育紀要』26号

謝辞　筆者の突然の申し出を快く引き受けてくださり，約1年に渡る聴講と，講義の録音を許可してくださった小池寿子先生に心から御礼申し上げます。

資料1　講義の文字化原稿　　＝板書　　＿学生がわからなかった語句

1996．7．8の講義

講義のテーマ

それで，前回すこしビデオの後，お話を始めたわけですが，東方のビザンチンの美術に対して今度は西ヨーロッパの美術のお話を始めます。それで年表のですね，ロマネスクゴシックという部分は，前回，前回のビデオの部分に入っていたわけですが，その前の10世紀までですね，で，年表の方には初期中世というふうに書き込んでもらっただいたい7世紀8世紀9世紀10世紀という部分のお話です。いいですか。

時代背景

それじゃ，先週少しお話を始めましたように，えー西ヨーロッパの方では，476年にローマ帝国が滅亡した後ですね，北の方からさまざまな北方民族が南へ移動してきたわけです。それで，それでですね，今日のイギリスにはアングロサクソンと呼ばれる人種がほぼ9世紀ごろまでに定住します。それから今日のドイツにあたる部分にゲルマン人という民族が定住します。今日のフランスにあたる地域にフランク民族，そして今日のスペインにあたる地域にゴート，特に東ゴートなんですけれども，あ間違えた西ゴーストなんですけれども，今挙げた民族だけではなくて，その他にもさまざまな民族が住み着くことになります。え，でこれは今お話ししてきた地中海に文化を築いた人達のことをラテン民族というふうに言いまして，この地中海一体に住んだ地中海文化を築き上げたラテン民族にたいして，北から移住してきた人達を北方諸民族というふうにして区別しているんですね。それでこの7世紀から10世紀までという間に彼らは独自の国とまでは行かないけれども，一つの共同体というものを築き上げていくんです。

当時の美術の特徴

で，この時代を，特に初期中世と呼んでいて，美術史の上ではですね，前回お見せしたロマネスク，ゴシックのような，えー彫刻及び建築を中心としたヨーロッパ美術が花開く前に，もっとその携帯用のですね，要するにその，その土地と結び付いて建物を建てて，そして，えー，その建物を，彫刻とかで装飾するという形ではなくて，持ち運びの可能な携帯用の美術というのが，主に，ま，彼らの財産として残されるわけです。それで，あの，これ年表の方に書いてないんですが，いつか皆さんに紹介したカラー版西洋美術史ていう本の中には，えー少し細かく時代区分が書かれていますけれども，特にあの，特にですね，5世紀から7世紀まで，というのはこれ，あのーフランス，今日のフランスを中心としてメロビングという一つの王朝を築き上げました。それは特にメロビング王朝の美術，そしてその次にですね，カロリングという王朝が成立して，この時代をカロリング王朝美術，で次いで今日のドイツを中心としてオットー王朝という王朝が成立しまして，それをオットー王朝の美術というふうに一応区別しているんです。

時代背景 3つの王朝

それでは，簡略に，あのー，特にメロビング，カロリング，オットーという3つの王朝について説明しておきますと，（板書）で，このメロビングという今日のフランスを中心として発達した，まー王朝なんですが，もし音楽の好きな人がいるならば，えー，ワグナーという作曲家がですね，作ったオペラというのは，このメロビング朝の人たちをテーマにしたものがその中に含まれています。それで，彼らはほとんど，えー美術作品を残していない，ですけれども，特に工芸品とですね，幾つかの写本が今日伝わっています。それで，そのメロビング朝が，滅びてから西暦800年ですね，カルロスという一人の非常に強力な人物が，えー，カロリング朝という王朝を打ち立てるんですね。で，このカルロスは800年に西ローマ帝国というかつてさっきも黒板に書きましたように476年に滅亡した西ローマ帝国を復興させて，そして新たな，ま，西ローマ帝国という，王国を建てることになるんです。しかし，そこの首都はですね，アーフェン（板書）アーフェンという今日のドイツですね，えー，フランスとドイツの，ま，国境に位置するアーフェンという町を首都としてカロリング朝という王朝を建てることになるわけです。えー，で，このカルロスという人物の後，ま2代に渡ってこのアーフェンを中心としてカロリング朝美術というのを展開するのですけれども，その後，特にそのカルロスの孫にあたる人達がですね，仲たがいをして，そして，ま帝国が分裂してしまうんです。

王朝のその後

ま，そこの辺は世界史の授業じゃないので，あんまり詳しくは詳しい話をしてはわかりにくいと思うんですが，ま，このカルロス大帝の孫にあたる人達が帝国を分裂させたことによって，え，今日のですね，フランス，ドイツそして中部ヨーロッパという3つの国の基礎になる部分が出来上がっていきますね。ちょうどですね，このカルロスの孫にあたる人達が今日のフランス，今日のドイツ，それから，今日のベルギーとかオランダとかですね，それからスイスといった地域にあたる中部ヨーロッパというふうに帝国を，ま分裂させてしまうわけなんです。で，そこで力を失ったこのカロリング朝に代わって今度はですね，全く人種の違う，ま今日のドイツ人の祖先である一族のうちオットー1世というのがですね，新たに名前を変えて，えー，神聖ローマ帝国という帝国を打ち立てるんです。で，そこの首都中心となっている町というのはあまり今日では知られていませんが，マグデブルクというんですね。ドイツの北の田舎町ですね。そこを中心として神聖ローマ帝国という帝国を築き上げるんです。

時代背景まとめ

で，ま，皆さんの頭の中では，だいたいこの中世初期という時代にメロビング朝，カロリング朝，オットー朝という3つ王朝が支配してそして，今までお話してきたビザンチン帝国の美術とは全く趣の異なった美術を残したといううふうにですね，記憶しておいていただければよいのではないかと…。

本論「写本」について

それで，その中で特に今日扱うのはですね，写本と工芸です。それで先程言いましたように建築，彫刻そして，まー皆様いちばんなじんでいる絵画，そういった大型の美術はこの頃はまだ作られずに，先程言いましたように持ち運びができる携帯用の小型のですね，美術というのが彼らの主流になって来るわけです。それで特にその写本についてですね，少し，詳しくスライドを見ながら見ていこうと思います。(板書)

資料2　学生がわからなかった言葉

アングロサクソン
住み着く
築く
築き上げる
共同体
携帯用
持ち運び
滅びて
打ち立てる
復興させて
国境
展開する
仲たがいをして
分裂して
力を失った
支配して
ともかくとして
趣の異なった
主流
磨滅
磨り減ってしまう
めくっていく
バビルス
鞣して
剝ぐ
衣
衣服
中とじ
臘
象る
構図
対になって
かいつまんで
司る
炎のついた
射る
射られた
（速く）かける
調教
馬具
香炉
着飾ってる
水路
入り組んでいる
水蒸気
かすむ
しっとりとした
もやがかかった
巨匠
謎解き
プラトニックラブ
はしご
導かれて
復活した
（文化に）触れてる
地上
満たされて
酔いしれている
高み
繊細
まとっている
奏でている
すかす
透ける
狩り
理想郷
アルカディア
ユートピア
田園
（草木の）茂っている
開花した
～を踏まえて
拠点
フランダースの犬
補って
補うべく
範図
領域
原産
運河
入り組んだ
土砂
たまって
うずもれて
衰退して
世紀末的
他に例を見ない
タイムトリップ
栄える
便宜上
主題
ディテール
細部
特異
敬遠
忠実
凸面鏡
受難
埋葬